

日本が発信地となる日

～オーストラリアピアノ教育カンファレンスに出席して～

———今井顕先生（評議員・国際委員長）

スコダ先生の代理で、教育学会へ

2003年7月1～5日までメルボルン（豪州）で開催された《第6回オーストラリアン・ピアノ教育学会 6th Australasian Piano Pedagogy Conference》に招聘された。オーストラリアの都市を巡回しながら2年ごとに開催されるピアノ教育者を対象とした学会だが、その名の示すように豪州およびアジア各国（香港、インドネシア、マレーシア、タイ、シンガポールおよび日本）、そしてニュージーランド、南アフリカおよびカナダから総勢211名が参加した大規模な学会である。

当初はウィーンのピアニストで来日経験も多いパウロ・バドゥーラ＝スコダ氏が招聘されていたのだが諸事情からキャンセルとなり、小職がその代役として訪豪することになった。代理参加が確定したのは学会開始のわずか1週間前、代行すべきものは「公開レッスン」「リサイタル」「基調講演」の三項目で、今回の目玉だった氏の代役は、決して楽な仕事ではなかった。

メルボルンにあるヴィクトリアン芸術大学の音楽校舎を会場として使用し、会期中は連日公開レッスン、セミナー、ワークショップ、リサイタルやランチタイムコンサートそしてProf.Graham Fitch（南アフリカ）、Dr.Thomas Hecht（ニュージーランド/シンガポール・2003年度PTNAコンペティションの海外審査員）、Ian Munro（豪）、Dr.John Sharpley（豪）に小職を加えた5名のメインゲストによる基調講演などさまざまなイベントが行われ、どれも多数の聴衆とともに有意義な研究活動となっていた。

小職が担当した公開レッスンではメルボルン



▲リサイタル会場

在住の4名のアジア系学生によってモーツァルト、シューベルト、グラナドスおよびバッハの作品が演奏され、リサイタルはモーツァルト、ハイドン、ベートーヴェン、シューベルトの作品によるプログラムで聖マイケル教会にて開催、そして最終日の基調講演は「シューベルトのピアノ作品に内包される精神的背景」というテーマで行われた。

日本の教育システムの海外発信へ向けて

日本の音楽教育者の視線は欧米に向いており、そこから何を得心かが命題となり勝ちだが、今後は日本が発信地となってアジア諸国にさまざまなノウハウを伝達していくのも日本音楽教育界の大切な使命のひとつになるに違いないと感じた。日本はすでにクラシック音楽界の発展途上国ではない。さまざまな教材や教育システムの紹介も大切な行動のひとつだが、玉石混合の状況にあるものすべてをそのまま無差別に輸出するのではなく、その価値と特色を吟味し、評価した上で紹介できるのであればより大きな信頼を得ることができる。「この教材を使って良かったこと・疑問に思ったこと」のような形での感想をこまめに集積していくことも、将来のPTNAの国際的発展にあたって欠かせない糧となるだろう。



▶学会会場（ヴィクトリアン音楽大学）

◀講演レッスン＋基調講演会場

